

## 実践報告

# 札幌市立西岡北小学校

継続研究 6 年目

### (1) 研究内容

研究課題：「学校にアイヌ民族の方を招いて行う体験的学習に関する研究」

- アイヌ文化について正しい知識を得て理解を深めるとともに、北海道の先住民であるアイヌ民族の社会や文化を尊重する態度を養う。

### (2) 実践の内容

【実践①】札幌大学ウレシパクラブとの交流

#### ○ ねらい

アイヌ文化についての体験学習を通して、アイヌ民族の社会や文化を理解し、尊重する態度を養う。

#### ○ 学習内容

##### <ウレシパクラブの紹介>

最初に「イランカラプテ」（こんにちは）とアイヌ語での挨拶で交流がスタートした。子どもたちはこれまでの学習からアイヌ語に興味をもっているため、元気にアイヌ語で応えていた。ウレシパクラブの活動内容の説明を受け、アイヌ文化の継承の大切さを感じていた。また、札幌大学にアイヌ民族の歴史や文化を学ぶ団体があることを知り、より身近に感じることができた。

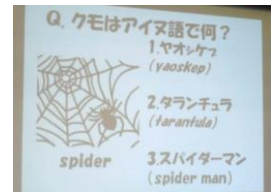


##### <アイヌ語を覚えよう！>

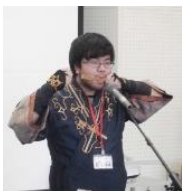


次にアイヌ語の発音をウレシパクラブの方に続いてまねをして練習した。普段使う日本語にアイヌ語がもとになっている言葉も多くあることを知り、アイヌ語がより身近になった。カルタの言葉の発音や意味を確認した後に、グループに分かれてカルタ遊びをした。子どもたちはカルタ遊びを通して言葉の意味を楽しみながら理解することができた。読み手になってくれたウレシパクラブの学生が驚くほど子どもたちは盛り上がっていた。

カルタ遊びの後は、おさらいとしてアイヌ語カルタクイズを行った。アイヌ民族の暮らしや地名、動物の名前など、現在の私たちの生活にも深い関わりのあることがクイズとして出題された。三択のクイズ形式が分かりやすく、楽しみながら取り組んでいた。正解を知るだけでなく、解説により学びを深めていた。



##### <アイヌの楽器・踊り>



次にムックリとトンコリの演奏を聞いた。ムックリを知っている子も多かったが、実際に聴いてみると、子どもたちは奥行きのある不思議な音色に思わず聴き入っていた。トンコリの演奏も、アイヌ民族の暮らしを思い浮かべながら、静かに聴くことができた。



演奏の後は、アイヌ舞踊を見た。昨年度よりも多くの種類の踊りを見ることができ、ますます興味を惹かれた子が多かった。「クリムセ（弓踊り）」、「フッタレチュイ（心臓比ベ）」、「エムシリムセ（刀の舞）」、「チャップヤク（雨ツバメの踊り）」と連続して4種類の踊りを披露していただいた。魔払いや楽しみのためなど踊りにはそれぞれ意味があり、踊りがアイヌの人たちの生活に根差していることを学ぶことができた。特に「エムシリムセ」では刀の重なる音に息をのみ、見入っていた。



その後、「チャップヤク」を学生と一緒に踊った。踊り方の説明を受けて学生と一緒に歌ったり体を動かしたりすることで楽しく学ぶことができた。



今年度は、体を動かす活動を多く取り入れたプログラムであったため、子どもたちにとって印象深い学習となった。学習の最後には、「ボロリムセ（大きな踊り）」を学生と子どもたち全員で輪になって踊り、心を一つにして学習を終えることができた。



また、担任から今年の冬季アジア札幌大会の開会式においてウレシパクラブの皆さんが重要な役割を果たしたことについて知らせることで、北海道の先住民族であるアイヌ民族への親しみと尊重の態度形成につながった。社会科や総合的な学習の時間のまとめとしての位置付けであるウレシパクラブとの交流は、体験的に学ぶ素晴らしい機会となった。

### (3) 研究のまとめ

#### ① 成果

- ・連絡調整の窓口がSUICC（大学）とウレシパクラブ（学生）の両方にあるため、運営と内容を整理して調整をすることができた。
- ・ウレシパクラブのみなさんが来ることで、北海道博物館の現地学習も含め、単元を通して子どもたちの意欲が高まり、主体的な学習となった。交流当日、実際に間近で見たり体験したりすることができるのは、他の何にも代え難い。

#### ② 課題

- ・ウレシパクラブとの日程調整が難しい。
- ・単元を通して授業改善を行うことで、効果的な取組となる。年度や担当教諭が変わっても活動が継承されるように教育課程を検証・改善していく必要がある。

#### ③ 提言「人権教育のすすめ」

- ・体験的活動は、計画的な学習を前提にしないと単なる物見遊山になってしまう。単元を通して学びを積み上げていくことが大切である。
- ・まずは小中学校が互いに情報交換して連携を広げることが、人権意識を体系的に高めるのに有効であると考えられる。